

Title	アラブ文法学における'Āmil論
Author(s)	池田, 修
Citation	大阪外国語大学学報. 29 p.25-p.33
Issue Date	1973-02-28
oaire:version	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/80456
rights	
Note	

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

Osaka University

アラブ文法学における ‘Āmil 論

The theory of ‘āmil conceived by the Arab grammarians

池 田 修

Osamu Ikeda

نظرية العامل عند النحاة العرب --- نحن نعلم ان النحو العربي قائم على نظرية العامل وهي نظرية اكثرها ماخوذ من علم الكلام والمنطق وانت تجد ان صفات العامل في النحو هي صفات العلة في علم الكلام تقريبا فكل مفعول لابد له من عامل كما ان كل مفعول لابد له من علة وليس للمفعول الواحد اكثر من واحد كما ان المفعول ليس له الا علة واحدة وكان النحاة قد جعلوا من هذا المنهج الفلسفي منطلقا لأعمالهم ومن هذا العامل محورا لدراساتهم وكان اصرارهم على هذا قد اوقعهم في مشكلات كثيرة اتبعوا انفسهم في محاولة التغلب عليها وقد حاولت في هذا البحث ان نقد نظرية العامل عند النحاة العرب ومناقشة لاحكامهم التي اقاموها على اساس من هذه الفكرة الفلسفية

The arabic grammar has adopted the theory of the ‘āmil, which has been borrowed from the islamic theology and logics, on its main base. The feature of the ‘āmil in the arabic grammar is something like that of the ‘illah or the cause in the islamic theology and logics. For example, Arab grammarians believed that every ma ‘mūl or the acted (word) should have one ‘āmil or the acting (word), as every ma‘lūl or the caused should have one ‘illah or the cause, as well as every ma‘mūl should not be allowed to have more than one ‘āmil as every ma ‘lūl should not be allowed to have more than one ‘illah.

The aim of this paper is to analyze the arabic traditional grammar from a viewpoint of the theory of the ‘āmil and to see how this theory has made the arabic grammar more sophisticated.

(1) アラビア語の文法学は、思弁的な傾向を強く示している。これは、文法学が独立した学問としての体裁を整えたバスラにおいて、思弁神学の影響を受けたためと考えられる。

バスラの文法学派に属する者の中には、自分自身ムタカリムーン（イスラム思弁神学者）の一人であるとしていた者もいたし、また、ギリシャの哲学、とりわけ論理学を身につけていた者もあった。イスラム暦2世紀初頭のバスラには、アラブ人のほか、ペルシャ人、インド人、シリ

ア人、およびギリシャ人などが住んでおり、彼らとの交流を経て、文法学の思弁的性格が強められたと考えられる。文法学者のことを、'ahl l-manṭiq (論理の人)と呼んでいる者さえある。

さて、文法学をこのような思弁的性格あるものとしているものは、何であろうか。本稿では、これを、アラブ文法家達が、“‘āmil 論”にもとづく言語の考察を行っていたことに主因を求め得るとの立場から、“‘āmil 論”とは何かを解明してみたい。

アラブ文法家といわれた人々は、言語現象を存在 (wujūd) の本質に深くかかわるものとしてとらえ、ある現象が生ずるのは、必ずその原因があつてのことであるとする因果律の考えを、アラビア語の文法現象の解明に応用した。例えば、アラビア語における語末母音は、何によって定まるかというような問題を設定し、これを 'āmil (作用語) によるものであるとした。作用を受ける語を, ma 'mūl (被作用語) としてとらえているので、'āmil 論というのは、'āmil-ma' mūl 論 (作用, 被作用語論) と呼ぶ方が適当かも知れない。しかし、本稿では簡単に 'āmil 論と呼ぶことにする。

さて、この 'āmil 論を具体的に解明する手だてとして、バスラークファ両文法学派の論争集 kitāb l-inṣāf 第5問を取りあげる。ここでは、両学派は、簡単な名詞文章における主語と述語の語末母音が raf' (即ち u 母音) となるのは、何によるためであるかという問題を議論している。⁽¹⁾

クーファ学派は、'al-mubtada' (以下主語と呼ぶ) が 'al-khabar (以下述語と呼ぶ) を raf' とし、逆に述語が主語を raf' にする。即ち主語と述語の双方が互いに raf' にしあう (yatarāfa' ani) であると主張している。

これに対してバスラ学派は、まず主語は、'al-ibtidā' (文頭にあること) のために raf' になる。述語も 'al-ibtidā' によって raf' になると主張した。

ここで注目されるのは、バスラ学派が、実際に発音もされていないし、書くことも出来ないような概念 'al-ibtidā' なるものを想定して、これが実際のことばに影響を与えるとみなしている点である。主語への 'al-ibtidā' の作用は、バスラ学派の一致した見解であったが、述語に関しては、① 'al-ibtidā' によって raf' となる。② 'al-ibtidā' と主語の双方によって raf' となる。③主語によって raf' になる。という三説に分れていた。このうち、③は、クーファ学派の主張の一部と同じであるが、前提条件として、主語は、'al-ibtidā' によって raf' となる、との立場をとっており、相互作用説をとなえるクーファ説とは、いちぢるしいちがいがある。

(2) クーファ学派は、主語は、述語を必要とし、述語は主語を必要とするものである。両者は、常に不即不離の関係にある。一方を除外して文の成立はのぞめない。主語と述語の双方が相互に raf' にしあっているのであって、一方が他方の欠如を許さないものであると考えた。そこで、これを一般化して、「主語と述語の双方が同時に 'āmil であり、ma'mūl でもあることは、差支えない」という 'āmil 論を展開したのである。図式化すると、

Zaidun 'akhūka サイドは、君の兄弟だ、

'āmil → ma'mūl (因 → 果)

ma'mūl ← 'āmil (果 ← 因) の如く表現出来る。

この主張を裏付けるためにクーファ学派は、その三つの例証をコーランから引用している。

① 'ayyāmmā tad'ū fa-lahu

l'asmā'u l-ḥusnā

「おまえたちがなんと呼ぼうと、もろもろの美称は、すべて神に属する、(17—110)

この文章において、'ayyāmmā は、tad'ū によって naṣb (対格位…母音 a) となり、tad'ū は、'ayyāmmā によって jazm (要求法) になっている。即ち相互に 'āmil と ma'mūl になりあっているとみた。

② 'ainamā takūnū yudrik-kum l-mawtu

「おまえたちがどこにしようとも、死はおまえたちに追いついてしまう、(4—78)

この文章においては、'ainamā は、takūnū により naṣb となり takūnū は、'ainamā により jazm になっている。即ち、相互に作用し合っているとみなしたのである。

③ 'ainamā tuwallū fa-thamma wajhu l-lāhi

「おまえたちがどこに向きを変えても、そこに神のお顔がある、(2—115)

この文章において、'ainamā と tuwallū の関係が上の二例と同様であるとしている。

以上の三例をクーファ学派が論証に用いたのは、これらがいずれも名詞文章の体をなしていないにもかかわらず、「'āmil と ma'mūl に同時かつ相互になりあっている」とみなしていたからにはかならない。三例の共通点は、条件詞 ('asmā' sh-shart) は、条件 ('ash-shart) と、その答え ('al-jawab) をなす部分の双方に作用し、条件と答えのいずれかは、条件詞に作用するという点に求められている。

(3) 以上の如く、クーファ学派は、自説を独自の 'āmil 論で説明した上で、バスラ説に対して、大体次のような反論を加えている。

バスラ学派がいう 'al-ibtidā' という概念は、①ことばで表示出来るものであるか②ことばで表示出来ないものか、のいずれかである。もし①の通りであれば、それは、'ism (名詞類) か fi'l (動詞類) か 'adāt (辞詞類) かのいずれかであらねばならない。

またもし②の如く、ことばで表現出来ないものであれば、主語となる名詞は rafī' maujūd(ことばとして実存する主格作用語) によってのみ raf' となるものである……クーファ学説の一つ……から、そのような②が名詞を raf' にするものとは認められない。

クーファ学派は、「'ism でも fi'l でも、'adāt でもないものは、知られていない」との立場をとった。ここに実は、クーファ学派の 'āmil 論の限界を我々はみて取ることが出来る。彼らにとって、ことばに置き代えることの出来ない 'āmil の存在は、認められなかったのである。こういう意味合では、クーファ学派は、経験的であったとみることが出来る。そこでクーファ学派は、①の線にそって 'al-ibtidā' というバスラ学派の主張する概念を、'ism と fi'l と 'adāt にそれぞれ想定して反論を加えた。

△もし 'al-ibtidā' を 'ism だと想定したら どうなるか。即ち、もし主語(名詞)を raf' にしているものが 'al-ibtidā'='ism だとすると、この 'ism 自体を raf' にする別の 'ism が更に先行していなければならない。こうして、主語に先行する無限の 'ism の存在を許さなければなら

なくなるので、このような説明は、成立しない。

△もし、'al-ibtidā' を fi'l だと想定すると、

Zaidun qā'imun ♪ザイドは立っている♪

という代りに

Zaidun qā'iman (naṣb)

としなければならない。何故なら

'al-ibtidā'

||
fi'l → Zaidun → qā'iman

の関係は、あたかも、

ḥaḍara Zaidun qā'iman

♪ザイドは、立って現われた♪

と同じだからである。

しかし事実は、Zaidun qā'imun となっており、'al-ibtidā' を fi'l と想定することは出来ない。

△更に 'al-ibtidā' を 'adāt とみなす場合は、'adāt が主語を raf' にすることは出来ない、という事実からして、問題にならないとした。

このようにして、クーファ学派は、バスラ説でいうところの 'al-ibtidā' というものは、ことばとして表示出来るような 'āmil として想定することは出来ない、これは、とりもなおさず 'āmil の欠如であって、'al-ibtidā' 即ち ♪文頭に立つ♪ という概念は、'āmil として認められないとした。

更に文章には、しばしば語末母音が naṣb となっている名詞や、語末母音のない単語などが文頭におかれることがあり、文頭におかれるとすべて raf' になるとは限らない……以上がクーファ学派の反論の要点である。

(4) バスラ学派は、はじめに簡単にふれたように、主語の 'āmil を al-ibtidā' であるとみなす点では一致していたが、述語の 'āmil を何にするかという点では、三派に分れていた。

まず第一のグループは、'al-ibtidā' は、ことばにおきかえることの出来る 'āmil の姿をとってはいないが、'āmil であることにちがいはないとし、この種の 'āmil は、知覚的なファクターではないとみなした。これを次のような例を引いて説明している。

この種の 'āmil は、あたかも、

'al-iḥlāqu lin-nāri 火でもやすこと

'al-ighrāqu lil-māi' 水に沈めること

'al-qaṭ'u lis-saifi 刀で切ること

のようなものであって、これらは、'amāra (複数 'amārāt = 表象) ないしは、dalāla (複数 dalālāt = しるし) のようなものである。けだし、表象ないしは、しるしというものは、♪ものの欠如♪の状態でも存在する性質をもっている。♪ものがあって♪それらが存在する場合と同じである、としている。

fa-l-' amāratu wa-d-dalālatu takūnu bi'admi shai'in kamā takūnu bi-wujūdi shai'in

‘表象やしるしは、あるものが存在することによってあると同様にあるものが欠如していても存在するものである。

また例えば、ここに二種類の着物があるとしよう。一方を他方と区別するために染めたとする、両者を識別するという立場からみれば、染めたものと染めなかったものとは共通であるということが出来る。即ち、識別することを基準におけば、‘染めるということ、……このような抽象的概念を‘もの、とみなす……が欠如していても、他の染めたものとの識別に不都合はおこらない。

このように、‘al-ibtidā’ という‘ことば、に置きかえの出来ないものであっても、これが主語の‘āmil になり得るのであるとした。

更に、主語の‘āmil が述語の‘āmil にもなることは、いくつかの‘āmil からの qiyās (類推) で明らかであるとした。

例えば, kāna とその姉妹語, ‘inna とその妹姉語, および ḡanna とその妹姉語などは、いずれもそれぞれの主語と述語の双方に作用を及ぼす‘āmil となっている。従って ‘al-ibtidā’ も両者の‘āmil であるとみなすのである。言語の実体を離れた思弁文法論であるが、このグループが最もよく論理の優位を取り入れているといえる。

第二のグループは、‘al-ibtidā’ と主語の双方が述語に‘āmil としてはたらくとした。その理由は、述語が両者のあとにおかれるということにつきるようだ。しかし、‘Al-‘anbārī は、「バスマ学派のなかには、これによる者が多かったが、論証に弱点があり、批判をまぬがれなかった」と述べている。どのような批判が寄せられたか、要約すると次のようになる。

この場合、名詞文章であるから主語は、名詞である。しかるに名詞は、本来‘āmil になる力を持っていない、彼らは、‘al-‘aṣlu fi-l-‘asmā’i ‘an lā ta‘mala ‘名詞の本質は、作用をしないことにある、と見なしていた。そこで主語には、‘āmil になる力がないことになり、勢い、‘al-ibtidā’ だけが‘āmil であるという結論になる。もし、あくまで、‘al-ibtidā’ と主語の双方が同時に述語に対する‘āmil だとすると、‘力のないものを力のあるものに加えると力のないものになる、という論理に照して、‘āmil の欠如が生じてしまうではないかとした。

「‘al-ibtidā’ は、それだけが述語に対する‘āmil となり、主語は、その仲介をするものである。なぜなら両者は、不即不離の関係にあるからである」

「これは、火が水を、やかんとたきぎを介して熱する姿にたとえられる。火が熱し、水が熱くなるというのは、やかんとたきぎがある場合においてではあるが、たきぎややかんそれらだけでは、水を熱く出来ず、これが出来るのは、火だけである」

このような‘āmil 論によって、第二のグループは、批判されたのである。

第三のグループは、‘al-ibtidā’ が主語に作用し、主語が単独で述語に作用するという一派であった。彼らが主張したのは、‘al-ibtidā’ は‘āmil ma‘nawīyy (ことばでは代用出来ない抽象的な‘āmil) であって、このような‘āmil は、作用する力が弱わく、‘ことば、それ自身が‘āmil となっている場合のように二つのものに同時に作用することは出来ない。そこで上のような見解の表明をしたものである。

しかしこの一派も次のような批判を受けてしまった。

‘al-ibtidā’ を主語の ‘āmil とみなす以上それは、同時に 述語にも ‘āmil としてはたらかねばならない。何故なら述語は、叙述的地位をしめているからである。ここでアラブの文法家は、「waṣf (属権の叙述) は、意味上、mawṣūf (属権の主体) に等しい」という論理を応用して、主語と述語が意味上、同じだとしたのである。

例えば、

Zaidun qā’imun ♪ザイドは立っている♪

‘Amrun dhāhibun ♪アムルは行きつつある♪

などにおいて、qā’imun や dhāhibun は、共に叙述的地位をしめており、更に、

Zaidun ash-shamsu ḥusnan

♪ザイドは太陽のように美しい♪

というような文章は、

yatanazzalu Zaidun manzilata sh-shamsi ḥusnan

♪ザイドは、美しさという点で太陽の立場にある♪と、みなした。

また同様に、

‘Amruni l-’asadu shiddatan

♪アムルはライオンのように強い♪

は、♪アムルは、強さという点でライオンの立場にある♪とみなし、

‘Abū yūsufu ‘Abū ḥanīfata

♪アブーユースフは、(イスラム法学において)アブーハニーファの地位にある♪

‘azwājuhu ‘ummahātuhum

♪彼(予言者)の妻たちは、彼らの母の立場にある♪(コーラン33—6)

等いずれも、述語が主語の属性の叙述にあたり、意味上、waṣf = mawṣūf であるとしたのである。こうして彼らは、一般論として「waṣf の ‘āmil は、その ‘āmil の強弱にかかわりなく mawṣūf のアーミルである」という命題を帰納したのである。

以上の通りバスラ学派内の三つのグループは、互いに批判を加えて、次第に第一のグループの考えをとるに至った。即ち、「主語と述語の共通の ‘āmil は、‘al-ibtidā’ である」とする主張で、これは、「主語と述語は、不即不離の関係にあり双方が他に対して ‘āmil になり同時に ma‘mūl になっている」とするクーファ学派の主張と対立したのである。

(5) バスラ学派は、クーファ説に対しては、次のような反論を展開した。

①「クーファの主張の通りとすると、muḥāl (不可能) におち入る。何故なら ‘āmil は、常に ma‘mūl に先行するものと推論出来るからだ」。もし、主語と述語が、たがいに他に対して ‘āmil であり、同時 ma‘mūl であるとすれば、共に他に対して、先行していなければならないが、そのようなことは、あり得ない。

②第二の理由は、「あるものに作用する ‘āmil が存在する限り、他の ‘āmil がその同じものに介入することは出来ない。何故なら ‘āmil は、他の ‘āmil に介入出来ないからである」という

‘āmil 論によるものである。これを実例で示すと次のようになる。

kāna Zaidun ‘akhāka

＊ザイドは、君の兄弟であった、

‘inna Zaidan ‘akhūka

＊ザイドは、君の兄弟だ、

zanantu Zaidan ‘akhāka

＊私は、ザイドは、君の兄弟と思った、

これらの文は、kāna, ‘inna, および zanantu を ‘āmil とみたてることによってのみ理解出来るのであって、Zaidun と ‘akhūka は、共に ‘āmil とみなすことが出来ない。

次にバスラ学派は、クーファ側が例証に出した前述のコーランの3例（17—110, 4—78, 2—115）をめぐる次の三点に基いて反論を加えた。

①これらの文において、‘ayyāmmā や ‘ainamā のあとにある動詞は、‘ayyāmmā や ‘ainamā によって、（即ちこれらを ‘āmil として）jazm（要求法）になっているのではなく、‘in によっている。もっとも ‘in は、本文にはないが ‘ayyāmmā や ‘ainamā が、ことばの上では、‘in の代用をつとめているだけにすぎない。‘ayyāmmā や ‘ainamā は、本来名詞であり、何物にも作用する力を持っていない。

②クーファ学派は、‘ayyāmmā tad‘ū の関係を相互に ‘āmil と ma‘mūl になりあっている例としているが、①の通り ‘ayyāmmā は、ことばの上でも、作用の上でも、‘in の代用をつとめているにすぎない。仮に相互に作用するとしても、それぞれのはたらき方にちがいがあればかまわない。即ち一方は、他を jazm とし、他方は、相手を naṣb にするというような場合がこれに当る。彼らは、「はたらきのちがう2つの ‘āmil は、互いに作用し合ってもよい」という命題を持っていたのである。互いにはたらきあっているところの tad‘ū という動詞も、‘in（ここでは、ことばの上では、‘ayyāmmā となっていると考える）という辞詞も共に ‘āmil であるから作用するのは、当然である。しかし、Zaidun ‘akhūka ＊ザイドは君の兄弟だ、においては、主語、述語共に名詞であり、名詞は本来作用しないのであるから、クーファ側のコーランからの例証は、この名詞文章を論ずるのにあてはめるのは、適当でないとした。

③クーファ学派は、‘al-ibtidā’ を名詞か、動詞か、辞詞かのいずれかに想定しようとしているが前述の通り、バスラ学派は、ことばの姿をとらない ‘āmil ma‘nawiyy という抽象的概念を承認して、反論している。もっとも、このような抽象的概念を、実際のことばに作用する ‘āmil として認めていたのは、バスラ学派だけではない。クーファ学派も、動詞未完了形直接法の語末母音が u となるのはこれを a としたり jazm にしたりする ‘āmil 例えば ‘an とか lam などのつかない状態によるとし、この状態を一種の ‘āmil ma‘nawiyy としてとらえているのである。‘āmil 論のなかでも、‘āmil ma‘nawiyy の承認は、一段と思弁の性格を文法学に与えているものであるが、これをめぐるやりとりで有名なのは、‘al-Jarmī と ‘al-Farrā’ の論争として伝えられているものである。

また、クーファ学派が「文頭に、対格や語末母音を持たない単語および辞詞などがみられる。

しかるに 'al-ibtidā' が raf' (語末母音 u) とする 'āmil であるとするならば、実際の言語現象に合致しなくなる」と反論しているのに対しては、大体次のように答えている。

① manṣūbāt (対格となっている名詞) が文頭におかれている場合、これをことばの上では、文頭におかれているとしても、論理的推定に従えば、後置とみなすべきだとした。その理由として、すべての manṣūbāt は、動詞の目的語がこれに類するもので、目的語は、常に 'āmil に先行されるべきであり、manṣūbāt には、'al-ibtidā' の序列を認めることは出来ないとした。

② musakkanāt (語末母音をとらないもの) が文頭にある場合、二つのケースが考えられる。一つは、発音上は、前置されていても、taqdīr (推論) が伴わないもの、今一つは、発音と taqdīr の双方において、前置されている場合である。

前者は、①のように taqdīr によって後置であると判断する。

後者は、はじめから 'i'rāb (語末母音の変化) を当然附すべきものと、そうでないものに分けて取りあげねばならない。

kam とか man など、常に語末母音がない、つまり sukūn であるが 'al-ibtidā' によって、raf' (主格位) にあると判断出来る。また 'i'rāb を本来有しないものは、'al-ibtidā' による raf' ということ判断する必要はない。

(6) さて、以上が kitāb l-'inṣāf 第5問をめぐる両派の論争の概要であるが、この書物の中で論ぜられている(2)問中、そのほとんどにわたって、'āmil 論にもとづくやりとりが展開されているのである。特に第5、6、10、11、12、19、22、29、30、34、55、56、74、75、76、79、85の17問は、いずれも、'āmil は何かをめぐる論争となっている。

アラブの文法家達は、アラビア語の単語や文の構造、用法など、今日我々が学ぶべき多くの重要な問題の研究を行っているが、しかし、彼らは、言語現象を自然そのものとみなすことによって、これの解明に因果律を応用し、はなばなしい 'āmil 論争を展開しているのである。かくして、文法学のかかなりの部分は、言語の実態をはなれた 'āmil 論を軸として体系づけられるに至った。

このような 'āmil 論は、アラビア語の最古の文法書となっている kitāb Sibawaih において、すでに大幅に取り入れられている。そこでは、'al-ibtidā' という抽象的概念で名詞文章の主語や述語の格変化が説明されている。「各々の 'āmil は、その文字(子音)にひとつの発音(母音)を附与する。その文字とは、ḥarf l-'i'rāb (語末母音のつく文字) のことである」(kitāb I-p. 2) の如きがそれである。⁽²⁾

さて、このような 'āmil 論を文法学に応用することに批判を加えた者はいなかったであろうか。'Aḥmad 'Amīn は、「古い文法学は、'āmil 論を基礎としていたが、'Ibn Jinniyy がこれをつくがえし、作用するものは、'al-mutakallim (話者) 以外にはないとの新しい理論を展開した」と述べている。⁽³⁾

しかし、'Ibn Jinniyy は、次のようにも述べている。

「作用は、'āmil によってなされる。例えば
qāma Bakrun バクルは立った、

ra'aytu Bakran 〽私は、バクルを見た、

marartu bi-Bakrin 〽私は、バクルのそばを通った、

において、語末母音のつく文字の母音変化を行っているのは、'āmil のちがいによるものである」('al-munṣif I-4)⁽⁴⁾。このほか彼は、主著 'al-ḥaṣā'ish の中で三種の 'āmil を認めている。それらは、'āmil lafẓiyy, 'āmil ma'nawiyy および 'āmil lafẓiyy ma'nawiyy の三種で、前二者は、従来の 'āmil 論にしばしば登場するものであるが、最後の 'āmil lafẓiyy ma'nawiyy は、彼の発明である。これは、名詞文章において、主語を 'āmil lafẓiyy とみなし、'al-ibtidā' を 'āmil ma'nawiyy とみだてて、両者をからみ合せた概念である⁽⁵⁾。このようにみえてくると、Ibn Jinniyy も人一倍 'āmil 論によっていたことが明らかになる。

'Ibn mālik は、

'in 'āmilāni qtaḍayā fī smin 'amal qablu falil wāḥidi minhā l-'amal

〽もしふたつの 'āmil がひとつの名詞に作用するを要する場合であっても、ふたつのうちひとつの 'āmil だけが作用する、(al-'alfiyya: at-tanāzu' fī l-'amal 第1行),⁽⁶⁾と述べているが、これは、「ある ma'mūl にふたつの 'āmil が作用し得ない」という 'āmil 論の援用にすぎない。

また条件詞は、'in の意味を、疑問詞は、hamza の意味を含んでおり、

man ḍarabta 〽君は、誰を打ったか、は、

'a man ḍarabta が本来の姿であるが、hamza が省略されているにすぎない、とする 'Ibn 'uṣfūr の説は、「'āmil は、常に ma'mūl に先行する」という 'āmil 論によっていることは明らかである。⁽⁷⁾

注

- (1) 'al-'inṣāf: Muḥyi ad-dīn: カイロ 1945. によった。
- (2) le livre de Sibawaihi: Hartwig Derenbourg 1970. (リプリント)
- (3) zuhr 'al-'islām: 2—117.
- (4) 'al-munṣif: この書物は、Ibn Jinniyy が 'Uthmān 'al-māziniyy 著 kitāb at-taṣrīf の解説として著わしたもの。Ibrāhīm muṣṭafā および 'abd allāh 'Amin 両名によるカイロ、1954年版がある。
- (5) 'al-khaṣā'ish I—9, I—337, 2—385 など 'āmil を論じている。カイロ、1952.
- (6) sharḥ ibn 'Aqīl, カイロ、1964.
- (7) As-suyūṭiyy: 'al-'aṣḥbāh wa-an-naẓā'ir. ハイデルアーバード H1359. I—255.